

## 〈資料〉 コモンモラリティとしての最高道德

永安幸正

グローバル化社会では、「コモンモラリティ」（共通共有の倫理道德）が現実形成されつつある。それには、いろいろな人々や機関によるさまざまなアプローチがある。そうした現実にもとづいて、学問としても共通共有の学問も出現しつつある。

廣池千九郎は、一九三〇年代に「道德科学」（モラロジー）という学問を創建したが、それは最高道德という高い次元のコモンモラリティを開示するものである。

（注）廣池千九郎『道德科学の論文』全十巻、モラロジー研究所刊。

廣池の提案したモラロジー（moralogy）は、次の特性を有する。

- ①世界の偉大な文明文化の精神的基礎となる世界聖人の教えに注目するか、宗教としてよりも、道德としての見方を根本とする。
- ②その基礎の上に人類の歴史、経験、現代の科学を統合する。
- ③人類の生き方を実践的、具体的に明らかにする。
- ④それは、地球環境の保全から、生命情報（優生学批判）、社会構成原理、個人の人生と集団の運命、幸福、世界平和まで、人類の栄枯盛衰の法則を道德の立場から提示する。

ここでは、廣池千九郎の提唱するモラロジーと最高道德がコモンモラリティとその研究であると考えられるゆえんを示すため、彼の書いたものから資料を順次、紹介したい。

廣池が「モラロジー」と名付ける学問は、狭い意味の倫理道德論ではなく、既存の世界的宗教、科学、歴史、日常経験をすべて統合していく総合的な人間学である。以下、モラロジーにいうところの最高道德がいかなる意味で人類に共有される「コモンモラリティ」であるかを資料をもとにして示そう。（ゴチックは永安）

資料1 道德科学とは何か。

「いま私がここに公にせんとするところの道德科学と申すものは、因襲的道德及び最高道德の原理・実質及び内容を比較研究し、且つ併せてその実行の効果を科学的に証明せんとする一つの新科学であります。日本語の道德科学という語は、英語のモラル・サイエンス（moral science）の訳語でありますから、いま私は学術上の名称として、これをモラロジー（moralogy）と名付けたのであります。」（『論文』①5ページ、ゴチックは引用者）

資料2 モラロジーの目的は道德の比較研究にある。

「モラロジーにてはおよそ二つの目的を有しております。第一は古来人類の実行してきたところの因襲的道德の実行の効果を科学的に証明して道德実行の権威を明らかにすること、第二は古来

世界における諸聖人の実行したところの最高道德の性質及びその実行の効果を科学的に説明することとあります。」「〔論文〕①57ページ)

**資料3** 道德は人間の精神作用と行為の全体であり、自然の法則とそれに一致する人為の法則の全部を意味する。

「従来、通常、道德と称するは人間の精神もしくは行為の一部分の作用中、自己を損して相手方を益することを意味したのであります。しかるにモラロジーにていわゆる純粹正統の学問もしくは最高道德と称するは、自然の法則及びこれに一致するところの人為の法則の全部を意味するのであります。故にその意味極めて広範でありますので、おのずから従来のごとくに道德とは単に自己を損して他を益するというごとき淺薄な意味のものではないのであります。すなわちいわゆる最高道德は神の意思の表現なる自然の法則であるので、自己と相手方と第三者との全部に対して、その生存・發達・安心及び幸福を保証するものであります。」「〔論文〕①第2緒言、109ページ)

**資料4** 道德実行の効果を明らかにすることは急務である。

「古来世界各国に行なわれておるところの道德上の教訓によれば、道德は人間の行なねばならぬものであるとなし、且つその方法は自利を抑えて利他を主とすべきであるというように教えておるのであります。しかしながら、その教訓の内面においては、道德の実行は結局自己自身を益するも

のであるということを含んでおるのであります。しこうしてその実行の結果もまたかくのごとくなつておるのであります。ただ、従来その道德教育が不完全なるがために、道德を実行する人の中に甚だ好結果を得ぬ者がたくさんあったのであります。そこで道德実行の効果に関しては、今日多数の人が疑いを挟んでおるのであります。しかしながらこれは道德の実行に方りてその方法宜しきを得ざるためであるので、道德の実行そのものに非難すべき点はないのであります。」「〔論文〕①14—15ページ)

「およそ自己の保存及び發達を希うことは人間の本能でありまして、いやしくも肉体を有する以上はこの精神作用を減却することは出来ませぬ。しかるに一方には、道德の実行は自利を捨てて利他を主とするにありという教訓があり、他方においては、たとい多少でもかかる教訓を裏書きする事実が存在しておるとしたならば、何をもって楽しんで道德を行うものがありましようや。ここににおいて道德実行の効果を科学的に証明する研究は、実に世界のあらゆる事業中最大急務の一つであります。」「(前項より)

**資料5** 現代における人類進化の要は、五つの系統の道德における「世界聖人」の教説を人類の精神に注入するにある。

「元来、この人間は、天啓にては、神の創造であり且つ神の力によりて進化するものと称せられ

ており、科学にては、自然の発生物であつて進化の要素を有するものと称せられておるの  
あります。すなわちいずれにしても、人間はこの宇宙間における自然の産物中、優越せる精神作用  
を有するものにて、絶えず創造せられ且つ進化するものであるのです。しかしながら、その創造と  
進化とはいかに物質をもつて人間を培養するもその効力はないのであります。しこうしてその人間  
に対する創造及び進化は人間の精神に対して人間の過去の経験の結果たる学問及び道德に加うるに  
聖人の教説を注入し、もつてこれを開発するにあるのです。」〔論文〕①第1緒言、121―23ページ〕

**資料6** 五つの道德系統とは何か。

「第一は、ギリシアのソクラテスを祖とする道德系統

第二は、ユダヤのイエス・キリストを祖とする道德系統

第三は、インドの釈迦を祖とする道德系統

第四は、中国の孔子を祖とする道德系統

第五は、すなわち、日本皇室の御祖先天照大神及び日本歴代の天皇の御聖徳を中心とする道德系統  
であります。

右列記の順序はヨーロッパよりアジアに及ぼしたるものにて、上下の区別を付したものではありません。  
ませぬ。」〔論文〕⑤4ページ〕

**資料7** 真理に到達するには四つの方法がある。

「およそ宇宙の真理もしくは原理を説明する方法は四つあるのです。

第一は天啓でありまして、これは宗教にて神とか仏とか申しておるところの宇宙の本体が、人間  
の中にて最高慈悲心を有する或る人の心と一致した場合に、その人に向かって人類を救済し進歩さ  
する法則を命令的に啓示するものであります。・・・

第二は聖人・偉人または宗教の祖師であります。

第三は一般多数人の古くより今日までの経験の結果であります。

第四はすなわち哲学及び科学の研究であります。これは宇宙の真理もしくは宇宙の現象を各専門  
の学者が分業して、ある一方面から一部分ずつこれを秩序的に系統を立てて研究せしものであつて、  
単純な古来の教訓や一般人の経験よりいっそう確実なものであります。」〔論文〕①62―63ページ〕

**資料8** 科学を通じて宗教の權威を高める。

「また宗教家は常にいわく、「今日の科学は甚だ不完全にして、ことごとく宇宙の真理を明らかに  
なし得るものにあらず」と。全くそのとおりです。しかしながら、たとい今日の科学が不完全でも、  
科学を知つておる者と知らぬ者との間には、人間の価値において大なる相違があるのです。特に宗  
教家が科学を知つて、今日の進歩せる科学の力を借りて、その宗教の真理を説明すれば、その効果  
は多大なるものでしょう。」〔論文〕①68ページ〕

資料9 道徳科学と倫理学を統合する。

「道徳科学と倫理学との区別を一言にして申しますれば、前者は道徳実行の効果を科学的に証明せんとする精神科学にして、後者は主として道徳の原理を科学的に説明するものであります。従来倫理学者の研究中には、道徳実行の効果を科学的に証明せんとする企てもないではないが、それがいまだ十分に成功しなかったことは前に述べましたとおりです。・・・

これを行えば必ず善い結果があるということが科学的に証明されておることを行うので、はじめてその道徳実行に熱心も加わつてきて、成功もするし幸福にもなるのです。しかしまたここに注意すべきことは各人同じく道徳を行うても、その各人はみなその運命の素質（先天的ならびに後天的運命を指す）を異にするが故に、甲は幸福を得れども乙は然らざることがあるのです。」（論文①58—59ページ）

資料10 幸福の意味と実現の方法とは何か。

「われわれ人間の不断の活動の目的は、みな幸福を享受しようとするにあるのです。しこうしてそのいわゆる幸福は人ごとに異なるとするも、二〇世紀における文明人の考えはたいい一致しておつて、幸福の實質は自己の健康・長命・開運及び自己の子孫の永久的繁栄にあるのです。しこうしてすべての人々は、この目的を達せんがために終身營々としてその職務もしくは事業に努力するのみならず、知識を研ぎ、道徳の修養法を講じ、もしくは宗教の信仰をなして、その目的の達成を

神に祈るのです。それにもかかわらず必ずしもその効果はないのです。これ何故でしょうか。ここにおいてはじめて道徳及び信仰の価値を疑うに至るのです。これ実に愚かなることでありませう。

そもそも幸福は神に対する信仰のみにて得らるるものではないのです。しこうしてこれは神の心に一致する高尚なる道徳心の発現及びこれに合致する道徳上の若干条件の実行によりてはじめて得らるるのです。換言すれば究竟において幸福は信仰の結果ではなくて、道徳実行の結果にほかならぬのです。ただ道徳実行の基礎を神（本体）の信仰もしくはある宗教の信仰に置くか、単に倫理説もしくは学問上の理論すなわち人間の知識に置くかということが一つの問題であるのです。しこうしてこの両者ともにおのおのの一利一害あり、且つ人ごとに適不適あれど、究極のところはその道徳実行の基礎を神の信仰に置くということが、個人の幸福享受の上にもまた一般社会改良の上にも、最も高き価値を有するということについて、古来世界の最高識者の観るところが一致しておるのがあります。」（論文①91ページ）

資料11 道徳のとらえ方と実行の共通共有の方法とは何か。

「さて倫理的及び宗教的両方面において教うることを観るに、道徳というものはその動機とそその目的とが善であれば、その結果はいずれでもよろしいように説いてあるのですが、それは誤りです。・・・

今後の知識あり思慮ある人々に対して、かかる物理的原理を無視せる教えを布いて、人間は道徳

さえ行えばその方法はいつでもよろしい、またその人の末路はいかに成り行くも差し支えなしというようなことのみを説くのでは、聖人は別として、およそわれわれ尋常人中には、これを聴き喜んで道徳の実行をなす人は漸次になくなることと考えられます。すなわち今日はすでにその時代になつております。」

「道徳実行上の諸条件と申すはおおよそ下記のごとくであります。

- (一) 動機
- (二) 目的
- (三) 方法
- (四) 時
  - ①時代
  - ②特別の時＝機会
- (五) 所
  - ①場所
  - ②特別の場所＝場合
- (六) 量
- (七) 質

(以上、資料12、「論文」①92―94ページ)

資料12 最高道徳は五つの原理から成る。

「第一は、自我没却の原理にて、ここに自我と申すは、利己的本能のことであります。元来、人間は自己保存の本能を有しておるので、この本能は人間生存の必要機能にして、これは道徳でもないが、同時に不道徳でもないのです。故に、たとえば、一日に肉三斤を食すればいきっておられる人が、それだけ食するのは害なれど、その人がもし肉四斤を食り食するときには、その剰余の一斤は利己的本能の発露であります。故にこれはその人の健康を害するに至るのであります。

第二は、神の原理にて、古来、神の信仰は前に記するところの人間の利己的本能をばそのままに心の中に有しながら、ただ形の上に神を信じて幸福を求むるにすぎないので、一利一害を免れませんでした。聖人正統の教えにては、まず自我を没却したる上に神の慈悲心を体得して、その慈悲心を実行するのでありますから、その信仰は真に生命を有するものであります。(第14章第5項及び第8項参照)。

第三は、義務先行の原理にて、人間の権利発生の原因を科学的に説明せる法律学上の一大新説であります。神といい、仏といい、聖人といい、伝統といい、資本家といい、地主というごときものは、みな義務先行の結果から出来たものであるのです。すべての人間はいずれもこの義務先行者を尊ぶと同時に、自ら義務先行者にならんとするの心懸けがなければならぬのであります(第14章第6

項参照)。

第四は、伝統の原理にて、これは聖人正統の学問及び道德にては極めて重大な条件であれど、今日、異端の学問、道德によりて、全くその影を没しておるのであります。もし、今日、この伝統の原理が世界の識者間のみにも普及せば、今日の世界の混乱状態はたちまちに平和に帰し、人類一般の安心及び幸福を実現するに至るのであります。(第十四章第九項参照)。

第五は、人心の開発(enlightenment)もしくは救済(salvation)の原理であります。およそ、人間はその利己的本能によりて、いずれの人々も、ただ物質を得ることのみを楽しむが故に、これを与えることのみを道德と考えておるのでありますが、人心の開発もしくは救済は、すべて人間をして、人間として生活する原理と方法とを教うるものであるから、物質獲得のごときは、その開発されもしくは救済されたる人ならば、容易におのずからこれをなし得るに至るのであります。故に人間の事業として、人心の開発もしくは救済は、根本的且つ永久的に人間全体を益するものであり、しこうしてこれを実行する当事者は、あらゆる善事をなす以上に重大なる功徳を積むことになるのです。(以上、「論文」①第二版序文、30—32ページ)

資料13 倫理道德の目的としての品性を完成した人の姿を描く。

「されば、真に最高道德によりて救済された人の状態は、たとえば深き淵のごときものであります。その水の深さが幾尋あるか、その水は流れておるかおらぬか、すべてみわけのつかぬ中に、一種いづべからざる神聖の気が秘められておるように見ゆるのであります。しこうしてその淵に臨む人が一種の靈感を受けたような思いをするに至るのであります。それ故に、その真に救済された人に接触する人々の心は自然にその救済された人に引き付けられてきて、すべて利己心をもって充たされておるところの凡俗の人といえども、最高道德の心に化せらるるに至るのであります。(中略)

いま真に最高道德を体得せる人は他人に対してその人を救済したいと思うほか、自利の心が無いのですから、その最高道德を実行するものの身辺は和氣藹然として春のごとく、いかなる未知新来の人も、たちまちにまずその心柔らぎて一種の安心を得るに至るのであります。ここにおいて、はじめてその入り来たれる人の心にその人の救われる最高道德の種子が植え付けらるるに至るのであります。かくのごとくにして、その救済されたる人の感化力はついに世界の平和及び全人類の幸福を実現させることが出来るのであります。」(「論文」⑧、227—229ページ)

以上が、廣池千九郎によって提唱された最高道德(シユープリームモラリティ)という高いレベルでのコモンモラリティである。これは、世界の異なる文化の間、人間の異なる生活領域の間、人

類の異なる歴史段階の間に見出され適用されるコモン（共通共有）のモラルである。また、倫理道徳のとらえ方についても、単に動機説か結果説かという素朴な見方でなく、動機、目的、方法、結果にわたる倫理道徳の全体を視野に入れたものであつて、今後の人類世界の倫理道徳として、これこそ共通共有されるべきコモンモラリティといえるであろう。

人類は、いろいろな文化圏を横断して、このようなモラロジーに示された倫理道徳のとらえ方と、最高道徳という高い次元のものを、共通共有のコモンモラリティとして実現していくべきであろう。